

OP11-2

小児型化学療法が有効であった17歳発症の成人型肝細胞癌

川村 哲夫¹⁾、望月 一弘¹⁾、伊藤 正樹¹⁾、赤井畑 美津子¹⁾、
菊田 敦¹⁾、鈴木 仁¹⁾、伊勢 一哉²⁾、斉藤 拓朗²⁾、後藤 満一²⁾、
北條 洋³⁾

福島県立医科大学小児科学講座¹⁾、福島県立医科大学外科学
第一講座²⁾、福島県立医科大学病理学第一講座³⁾

症例は18歳女性。17歳時に肝腫瘍破裂で発症、同日当学
附属病院にて緊急手術を施行した。術前検査では出血に伴
う貧血、Tumor marker では AFP 451475ng/ml、PIVKA2 も
867mAU/ml と高値を示し、画像上では肝内多発性で他臓器
への転移、浸潤は認めなかった。摘出された腫瘍は最大径
11cm で Stage3、PRETEXT4 に相当した。腫瘍は肝内に残存
しており、化学療法目的に術後当科に転科した。最終的な病
理診断は肝細胞癌であったが、AFP が極めて高値であり肝
芽腫様の組織像も伴っていた点から、JPLT-2 のプロトコ
ルに従い小児型の化学療法 course3 適応と考え CITA (CDDP
80mg/m², THR-ADR 30mg/m² x 2days) を 8 ケール施行した。治
療は極めて有効であり、残存腫瘍はほぼ消失、AFP も 7 ケ
ール終了後 6.2ng/ml と正常化した。現在も再発、転移を認
めず生存中である。今回の症例の様に肝細胞癌に対し、小
児型化学療法が著効を示した報告は国内では確認されず、
今回文献的考察と共に報告する。

OP11-3

肝臓に腫瘍性病変を認めた先天性門脈欠損症の2例の検討

田中 水緒¹⁾、佐藤 由紀子¹⁾、田中 祐吉¹⁾、阿部 泰子²⁾、村
上 徹³⁾、北河 徳彦³⁾、武 浩志³⁾、福里 吉充³⁾、大浜 用克³⁾、
相田 典子⁴⁾、加藤 啓輔⁵⁾

神奈川県立こども医療センター 病理科¹⁾、神奈川県立こ
ども医療センター 腫瘍科²⁾、神奈川県立こども医療セン
ター 外科³⁾、神奈川県立こども医療センター 放射線科⁴⁾、茨
城 西南医療センター 小児科⁵⁾

【はじめに】今回我々は、肝臓に腫瘍性病変を認めた門脈欠
損症の2例を経験し、各々の組織について検討を加えたので
報告する。【症例1】1歳0ヶ月。女児。38週2200gにて出
生、マススクリーニングにて高ガラクトース血症を指摘され
たのを契機に先天性門脈欠損症と診断された。肝機能障害が
進行し肝移植の適応と診断され、1歳0ヶ月時生体部分肝移
植術を施行。摘出された肝臓は128g, 14×7×4cm。摘出肝内
に5-21mm大の境界明瞭な結節を9個認めた。結節は病理学
的に良性結節性病変と診断された。術後軽快退院し、経過観
察中である。【症例2】1歳6ヶ月、女児。39週2070gで出
生。門脈欠損症及びファロー四徴症の診断で経過観察中、肝
右葉より突出する腫瘍を認め、摘出術が施行された。術前の
AFP 10290。組織学的には過形成病変を伴う肝芽腫（胎児型）
であった。完全摘除できたこと、および合併疾患があり高
リスクであることより、化学療法および放射線療法はなされ
ず、外来で経過観察されている。【考察】門脈欠損症の肝臓
に腫瘍性病変が発生した症例は検索し得た限りで14例報告
があり、良性病変として focal nodular hyperplasia, adenoma 等、
悪性腫瘍として hepatocellular carcinoma 及び hepatoblastoma
を認めている。門脈欠損症に腫瘍性病変が合併することは知
られているが、その発生のメカニズムにはまだ不明な部分が
多い。自験例の症例2は過形成病変内に肝芽腫が存在してお
り、その発生機序を考察するうえで大変興味深い。自験例に
ついて形態学的、免疫組織化学的検索および分子生物学的に
検討を行い報告する。